AF
JAP
1219
9

東雅巻之十五

草卉第十五　筑後守従五位下源君美撰

蘆葦アシ　天地開闢之初其形葦芽のごとく而て化出し神の名を可美葦牙彦舅尊とぞ申しゝと見えて倭には此葦原中國ともいひしと見えしうへに 旧事古事記日本紀等 我国にして此物多かりし事ハ是よりぞ見えたり 和名鈔[illegible]

俗には是をあしといひまし伊勢國にては
濱荻といふとそ人しりけり蘆濱葦也いなかより
も京に今もゐるの此よしも物名同じからぬ
事をもしらぬへしといふこそまことしといひ置と
に義此よしはしるへくもあらぬ倭名抄には
爾雅は玉篇抔等注を引く旅一名葦
一名蘆アシ葦亂之アシツノ葭初生之蘆

を蒂乃花名之と混せり本草綱目に據るに
葭とつれ葦蒿なり蒂ハ花葦蒿のうへつらの
葉は萌之或謂之蘆と段萩之葦れ初生と
いふはあしとよ詳ならずはわかりえかぬ花
をは苫といひまた萌の竹笋のごとくなるをは
蘆といふ古今のみよみしといひ修よりあるに
ノーといひしものなりし

萩ハキ倭名抄ニ比主此訓ヲ同く萩ハキ異
萩お似る非一種と混せりな草隠㑹め
是れ此は莫を萩似蕭而小中実或視之
蘧艮萩也至秋時成末ちら是を萑と
いふ其葉は似萑ニ細長く数尺一本花を萠と
呼ふ是は蕭と萩とも相同しと見てあり
萩と萩とは一物にして蕭とは異なる一物也

万葉集頃よ花薄此字讀くハナスヽキし

いふを語りを語せし前のよ根ハ薄此字

スヽキと讀むよりあまねくしなへりとて

稱しも正しくいつき此字秘用中へしいふ物

又こ民除麁冨李京猩宮 此布葉よ標る

よ蒼糸頭よ慈よ仮かと見へしたさしみて

冬きといふもの也 一種茎短きを名芒といふ

とえしたはよこノハヲスキといひしゆゑなし
てこそ穂に出ぬるをはハナスキといひて花とは
ヲハナといふなりスヽキをはしきといふ名は嘗しら云
ススキをはなはサヽといふにかよひてこそ細くして細
きといふ之きは草は人を備する雅なる
なりといふ之ハナヲをは万葉集に麻花と書也
里縁かな乱をともなきのといふ也藤袴は尾之

菅スゲ

茅チ

萱カヤ倭名抄に菅はスゲ茅はチ萱はカヤといふ

と注せり蘿碩閑頼李東陸本草等に拠て

又彼みしては菅といひ茅といふ実なるもの

又ては白菅は読ていふ萱茅之とうし菱草ても

菅鄙之ともまし白菅と数種ありて其苑さへと

萱とハ秋花さくを萱とハ申也又つはなとも
菅陽之スケといふもの也萱此外高陽之
萱茅とみえしも詩疏ニ茅草のといふもの一種
此外に茅ニ錢ふとの漢も陽錢一種萱と
いふもの此外にハ山萱といひて蘆とあせし
ものとみえてかう良門之陽之ヤニスケといふもの
も皆もち合明しれぬといふ物を明かしれ方

萬葉仮名又ケとはスケ之流筆は枝葉ありて
いかさまにしりかひしきりもなりかふ歳たすく
よたてり把之といふなりたてたるの細くさてりと
いふは芭をスきしいふてくるゝとも史かけと
いひかやといふ義は洋萱は字のさまも漢名は
ま廣益玉篇を引て筆應之と順しよりよく
かやといふ(こと)義もみえて此字まゝ他書には

又むかし日本紀に草祖草(カヤ)野姫をかやの

と旧事紀古事記に鹿屋野姫と見えし所に

も共に並讀くカヤノヒメといへるをさして古此讀を

カヤといひしは此草を總ていひしことしるべし

又和名抄に屋波微武の所名此にとさえ薦ず

紀日本紀に又鸕鷀草讀くウカヤといふ古事

紀にも鵜葺草をもて葺草二字を讀く

カヤといふ名は顕せり万葉集にも紀にも見えて以草
此字清くカヤカヤとはいひならへり古は何にも千
といひしもの也又従に千カヤといひまして千
八千ともいひ又万葉集に茅花と書るもあれ
破るもの箭針といふもの也 或人の説に茅を千ともいふことは赤色
なりし血のこぼれたりしをもて之を庶流常陸の血と
あらはしし地を血沼といふて後に蒼海といひて
神武天皇の兄宇迦斯を斬りし地を宇陀の血原と
いひしと見えしを後に浅茅原などいふなり

はへぬきたるくさを紀あるに似たるよし薄といふの
まことの同しきれ無しといふ名嫁ひく故に薄字を用ひ
たしかに無しよく萱の名ありといふも
微とまをしまをは又てはきるカヤといふは刈て屋を
葺く草なりけれはいふ也古事記に葺草と字を
カヤと読て万葉集に刈萱をカルカヤと読しなとえて
それこれは紀あるに似たれと草祖をカヤノヒメ
といひしとえし又紀に草といふの初にし
いふ所にすなはちこれを刈て屋葺く料とすへきを
すくカヤといふの称名あるへしともおもはれそ
酸漿ホヽツキ古事記に八岐大蛇の眼如赤酸漿と
見て日本紀にも見えたるなく赤酸漿なるはアカヽチといふ

と須せられたり古事記ニ赤加賀智と記して赤加

賀智といふハ今の酸醤といふもの也と須し又精

義抄の眼ハすゑてかゝれ苦されたり

古古の說ハ本綴としみえてられ說名称ニ

兼名苑を引て酸漿一名洛神珠ほゝつき

と須せり并に義ふ洋万葉集抄ニかゝちハ赤きとみえたりかゝちハ今の帝し

く赤きをといひ千とハこけの血ハこゝろといひしなるへし

ほゝつき二たハ或人の說ニ方ゝといふ実のつきめくるハかく

いふカヽとは
鬘の事なり
亢蘭カヽミ漢名拘那衛斯羅摩草一
名亢蘭と云カヽミ條長卿白斂ヒメカヽミ白前と
名カヽミ白歛をヤブカヾミと覆ふ亢蘭白歛
は蔓生亢蘭を蘿藦之別名蔓延して白歛と
山谷の間に生ずれば山カヽミといふ白前を別様
砂礫の上に蔓生して亢蘭に似たる者あれば

一 かゝいひ條を卿と菩薩をはおつ稱をとゑ
菩薩の字似くふしきられえヒメカゝこといひし
いか長名跡天羅摩敬王座しかひしも白敬
埵とゆく邪せられしえく無く綴く
かゝこといひし其み荒雅のゆゑくくたのかゝこ
とハ衆生を涅槃へ渡すれては安穏をあてゝ世志うさわる
たすれては元し羅摩邪志るし
あれはれ菩提埵をすくすとえてうの庭摩郍もは其実をい
ひ白薩埵とは其根埵をいひしうつくしたくそふしき

たゞまをかくこそいひしと蘘薩は今俗にナクサといふ莖
葉先まで白乾附かるをいふ　徐長卿を俗にフナハラといふ
こまかなるは志られ○カヽチといひカヽミといふもの也　古今附
またかしカヽチは赤きすアカヾチのことしと見えてられを
そのかたちといふも赤くして赤きれバこそあかちなり
そらしてを例なりしはかヽちこそは実れ赤くして赤きを
いひしまくられてかヽみといひしもの実赤くほそきあり
此蘿藦頭取草のよふ白蘞の一種赤蘞といふ花実切目
は白蘞と同し但表裏俱に赤しと見てかゝみとは此物
まかくかヽミのなかめんしともおもはれされ古説の
一例ともかく挑すへ
しくさのかくさるまた多し

茜

アカネ　倭名抄に蘇名苑注を引く茜をアカネ

可以染緋色と注りアカ子とハ赤根也こも根ハ赤き
を染むへきといふ也

藍 アヰ 倭名抄ニ唐韻云藍染草也アヰ
染色也澱也アヰ乃木藍也ツハキアヰ蓼藍ハタ
テアヰと注せりアヰハアヲ也略語之アヲとハ青之
色根の青色を染むへきといふ也ツハキアヰとハ
色の葉ハ光ありといふ也 ツハキの名ハ椿の注ニ見ゆ タテアヰとハ

こゝにみえ侍る万葉集に辛藍また搗藍
とよめりしもの是なるへし又万葉集に鶏冠草
結てカラアヰとよめりしを仙覚抄に顕昭古集
をしるす略所草又作鶏冠草依此義者可知
月草緑と見てすられし翡翠緑に鶏冠草をかつう
アヰといひしは是又一緑と見てよう
カラアヰとはそ
染れ藻に似たれ
是辛藍といひしやまた搗藍とよめりしは
けふの和名搗藍なとおもしるや詳ならぬ

紅藍クレノアヰ倭名抄ニ弁色立成を引く紅藍呉藍

並ニクレノアヰといふ也式ニは紅花の字を用

俗亦用之と注せり然れは呉之アヰは民

藍之名萬葉集ニ呉藍綾くクレナヰといふも

綾の勝也但し漢ニ呉藍といひしものを

藍也然して紅藍といふは都ニ呉藍を

いふ事ニ呉國より来りしゆゑ之民なり

黄草カイナ倭名抄染草也或は弁色立成を引く

黄草はカイナ延喜式には刈安草といふと

説見えし又草本説に本草を引く藎草なりカキ

十一川よりえ井といへる説ありて字を為義

是よりさき説見しかは詳ならず稀也黄草藎草

一物之よし見て説きわけて別録并著本草扉

本草綱目接字は藎草也も所衛風に茅所

尓雅に菉亦名王芻之といへり一名は藎草
可以染黄色といへり樵之さしはカイナといひかき
なといふもこそこ流の樵也しげく果ちる物なり
あるは刈採りてさとのちるをいひしかばあまる草
安家ともいひなりし井とはをとめいとく
藺みくさのかやとみえたり 此草まつ藍とも いふなり広韻に
緑は緑色を作鑑漢書 晋灼注に 草染緑となし埤蒼に
は緑與戻同みえてあやまりの方後にも千といへり戻の字

此諸説紛々にや此多遅を虎杖とする事
紀日本紀等に見えたる亦詳ならず姓氏録にも
見えてなりさりし古には多遅といひしを後に
多ヒリといひしにこそ義のこととは并に不詳

車前子ヲホハコ倭名抄に本草を引く車前子
一名芣苢ヲホハコといへる須せりヲホハコとは
大葉子之由あれは大葉子と見えしものならし

菴蘆子ハコ倭名類聚抄に菴蘆子は

ハコと須せり文徳実録にも見えし母子草と云

そのとは一名にして二物之母子草は鼠麹草

また鼠耳草ともいひ古の時は三月三日に

餅となせしもの之（草の餅は次に詳なり）また白蒿をもて

今俗にカハラハ、コリサと云もハハコといふ義ニ詳

李東璧が草木に掲けて鼠麹をは唐宋諸家不知とて

見へさりし倭名抄にもみへし草は本邦にも多く八唐代より

ハカマといふもの今俗に蘭の字をかく

ゆへらんといふものは漢にして蘭花といひ

蘭草とハ異なる物也これを混れていへは李東

璧か本草に詳に見えたりフヂバカマといふ義不詳

これ花淡紫色にて茎といふ色に似たる辨の

蘭花とあはせし袴に似たれはなれは 今按俗に 藁の袴の

いふか藤袴とはいひしなるへし又陶隠居か本草

されはしらのあはれ清ては こねさとうぬすれとく
みまちかひ家なしては うたかふへき事なきとも
かりけりされ家々のいにしへよりいひつたへし事とく
ゑらみうるへきすみもあれは

菊キク倭名抄に本草を引て菊はカハラヨモギ
一名カハラオハギ俗にはおなしきことくにいふ
注せり今キクといふものは注せす然れ
こそされはカハラヨモギもカハラオハギとい
ひしを後人俗字の音によりてキクとはいひし

されど歌の詞なるには皆ニキクとよみて讀まれ
は古今の俗なる讀み代の和名にもあまり
あり物る例すくなからば紫苑をさも
くさといひて俗にはシヲニといひて見えたれど讀
みはさくらしツニととなりいふなり桔梗をさも
もアリノヒフキといひて見えたれど讀にはきやう
といひ又臆にもされどエヤミグサ一名にカナ

いふ白蒿一訓にカハラヨモギといひぬるとは物に見えず
紫苑枝梗の名はまさに疑ふべし をニカナといひしは
その味の苦きをいふ也 ○宋の劉蒙が菊譜に紫菀一名
玉梅一名綉菊といふものの見えたれば和歌よりは後へ
かりし白菊なりとされば一名を綉菊といふ也 この名を新
羅といふは新羅の菊にはあれど我家に称して白を
しらぎといふは紫苑の字紫菀をもてしるしたる比附説に
よく綉菊をもてまぎらはしき事多くは我家より後へなりし
是之かとも混せし鴨跖一名綉毬草といふものもその
初家に漢名をもて紛れて鴨跖押不芦の名あるにてなりて
はやくも鴨跖といふ名も
出来しことなるべしは

蓬 ヨモギ 倭名抄に蒿名苑莪蒿を訓て蓬一

名草ヨモキ艾一名醫草と須ひ是しを名お

同しゆくしく採りしてうらすり蓬と艾と一称

又は蓬を詠の集織よこそ集柳鯊は

よくみて艮て是れ乳熊とつきれ是はる

苗葉は懼云れてよくしよて花顔菊花のいきい開か

さりがてよくよて展見ぬきて柳鯊れてよく

是れと艾ハヨモ今俗ヤモグサといふもの是なり

ヨモギといふ菜を俳モクサとは焼草也万葉集抄
よはモエル詞也ヨモギをモグサといふごとしといふ
名義抄に倭名類茵陳蒿をヒキヨモギと
いひ蔞蒿をも俗にヒキヨモギといひ白蒿一名
は蘩一名は皤蒿也シロヨモギともカウヨモギとも
いひ蔞蒿をも俗にカハラヨモギといへどもさう
おもふらむ蒿みれば名ともはヨモギといひしと

見えたり ヒキといふ名は下に詳にす又世人にも見えとも
ことは之カハラれ義を萬め須は見えてさうこふら
も侍る一名ありて二物あるゆゑに ヒキをもくよりいかにとし
多くあり 細辛をミラノネクナともヒキノヒタヒリサともいひ
葶藶をヒキサクラといふなり 並に下に詳なれ

萩

ハギ 倭名抄に爾雅注を引て萩一名蕭 此にハギ
といふとも按るに牧名用萩字并秋倉亮之辨
各立識萬葉集等には芽子字を用ひ来

には茅芒萱の字を用ひ漢語抄には萱を
鹿鳴草の字を用ゆ萩は本文未詳とも見え
ざり此説一たび出しより後輩今に至りて
萩の字をもはらはぎとなして花の字とは
用ゆるに及ばずはきといふ事にことさらは未詳
古の歌にはぎといふものゝ名とさだめし其の字倭名抄には
見えしごとし万葉集には榛の字をも読てはきといひ此字を
此字読てアキハキなとゝいひけるは此の説おこりしより流れわく
萩の字読てはぎとなしこそ作りて用ゆるに及ばれ去れ

といふものもえしらうとの根といふにこられはあ云とえ
されとも承非の疏に蕭をす似蒿といふは似たれと
而るによりては後藤文英の二字を以て傍証あり
しかるに此にまた永非をかへて蕭萩をさしそへりけり
鈔師なりし人のこころえて此の終せしにあやまち
まりけるを見るに古此時の後わかに標しかれと後藤氏もまた
其のかは始めと見てかりの見もこそ書此名にかむりさきま
かりし也なはおなじ説と従へしおもへしとぞめでゆひそう
ささ陸璣か疏には萩蒿或曰牛尾蒿と見て鄭夾漈か
疏には萩蒿或云牛尾蒿今菜宗謂之為萩子
きては一定の説ありとも見て様も又此ごとくも七夜
世多く又稱ふにも正しけりて牛尾蒿は萩子のこと
於ては此かきといふものに似て宴之装改全書え見へし胡
枝子といふものはぎといふなれとといひけりゆゑに胡枝子を

さらせし所はさきにいふハギのごとくみもあらし名が
陸璣が或曰牛尾蒿といひしも臣見るに萩といふものゝ
ありといひしはあやまれり鄭樵がいひしハ陸璣が牛尾蒿
此説によりて遂に藾子の説をも附会せしなれども
の説はさきだちし古の時萩といひしものゝまた
あられ家本にて古より此にハきといひし物刻彼みて
も古の時より蕭とも萩ともいひし今はその物を胡枝
子といふものなるべし萩の字読てハギとなれるもことさ
世俗に久しくありし見ときし秋芽の方言となりしに似たる
とその字にひかれおもうべくしもかなしかれど楊氏が鹿
鳴草といひしは小雅呦鹿の文に依る名にて七巻食経
の如く標ありもとしるさず
崔禹錫食経を引く萩菜一名萩蒿

此ヲハギ状如艾草而香作羹食之と注せり
ヲは大也ハキは似たるさといへり鼠尾草に
ハギといへる注せり此も花ハギに似て細密なる
ものといへる古語に密なるをハカといへり
蓍
メド仮名例に蓍敬な草注とみて蓍はメド其
茎為筮者也と注しけりメドの義不詳古にメド
といひしものハいつのまにありけむ是も亦不詳

今の俗メトとよて呼ぶもの三種あり
メトハキといふハ酉陽雑俎ニ合歓草ノ状如
蓍といふものメドキといふハ陳藏器本草ニ
見へし小蘗也一種メトキといふハ李東璧
本草ニ見へし鼠蓍也これらハぎといひき
といへるもの蓍也とは見えれ此すとも七友ガ水ニ西りし小蓍といふもの
本草これを鼠絲子ニ三十條ありて求めしといひくる
稀子をさら婦りしを瓜絲子も採捨ての跡ニ

ゐるを二つよれ
はせれ

瞿麦ナテシコ 倭名抄に考ふるに瞿麦一名大
蘭ナテシコ一則又トコナツといふと侍り万葉集
には石竹撫子ナテシコと書けるをナデ
シコといひて瞿麦の字を用ひ人家にも
れとは石竹此字を用ゆくも字の書なとく
いまめ古よも石竹とたゝしヤマトナテシコみて

東雅巻之十六

樹竹第十六

松 マツ義不詳倭名鈔果部に海松子の五粒松にて呼しく又乗に松子はマツのミといひしも海松といふもの即是新羅松子本草図經に五粒字當作五鬣音傳訛也五鬣為一叢といへしとのみいひし李東璧本草小五鬣者為二松子

松ドといふ也之　古説の例によりて一ツとは書きとい
ヰといふ也　扨て是を路るすれきとはめていふ
コ似たりとあへよりいひ傳へ来る事は、あやしきめ
かし新羅松をのけときは即今と称録より来ることの
也　彼国みても其地に産せし所なりとし多此樹なる
みは唐済松を賞し有之生深山中於如松柏實如瓜子
ありて人海にて見ゆ　数等にて玉角香ばかりて最奇とし
ほすりしとへ見えり此国人と稀強し物のきひおもほ
れよるとせしてる事のけときは、かしこより来れるなお
をまたは癸辛雜識に倭人所患以其国所産新羅松
為之即今之羅木之爲而香仰塵以板皆是之といへし
と或人の説に新羅松は乃則牙松也此方賞せられといふ
然之きとに宋人の口に羅木といひしそのは別にこれ
一物なるや　詳にしかねて見えへきり

柏力ハ倭名鈔木部ニ兼名苑云柏一名椈力
ヘといひ又果部ニ本草ヲ引て柏実一名椈子
加へといふを注せり（其の椈子の注ニ見へたり）我按して
柏ノ字借用ひし語にて力へといへるの名即今
の力やといふもの是也八岐大蛇の背上に松
柏生ひしなといふをは見へされとも其の
せられしをも繹澤ハりとて即今柏といふ

杉

スギ 倭名抄に爾雅注云杉似松可
以為船材 日本紀に大木としるせり 今按俗用ニ榲字
非也 榲ハ桂之類なり 古事記に素戔嗚神鬚
鬚を抜散し給へるハ則杉となれりとみえたり 万葉
集などには杉の字スクなる意なりといへり 其木の
直なる意をいひし也 倭名抄に俗用ニ榲字と
いへるは榲字を誤てスギといふなり 古事紀

以為瑞兆と被とは宋史
まえへ下不那るにありとや　像名翁是は爾雅として
檜柏　葉ハ松身にしてことはせりけれと見し
俗にいふ檜といへりのなは同しこともしれとみへたり
李東璧本草にみへたる　柏葉松身者檜之其葉尖硬又
謂ニ之栝ト人又名ニ圓柏一以別ニ側柏一と云へ通雅にて圓柏即刺柏不
謂檜之とみへ今ハ是と圓柏といふハ即ち俗にイブキと云
物にて側柏といふは京洛にコノテガシハと云也之古より
我国にてヒノキといふものハ何ゝ正字通に見へたる檜樣
似ニ沖核ニ軒如柏而兼ニ柏松之名ニ名檜ニ爾雅說文皆云檜柏
松身今檜葉四出葉半似東半如柏者ニ是木堅實ら身
内来謂之松身非是或松葉柏身康鐵道似とみへたり

さくらの紙まとしるすのハ我国にいふ所のヒノキ所見なりと
云へられ

樅

一モミ　和名集ニ臣木読てミノキといひしを
私勘ふに臣木ハモミノ木之と定めおきされ庄
豫州風土記ニ岡本天皇と后と大ニ波出池
温泉に幸行ましましける時の事をしるして大殿
戸有椹云臣木とこたへ奉りけり此記に椹読て
ムクとしるせる伝セしれし小蒼蒼ハムクノキとしるせし

のことも亦作ひて臣ハ木といひしなるへし私記云
説に按るに然れは神武紀日本紀に母木邑て
オモノキといへるのを俗に式樹とやいひけめらん
母木とは神武天皇孔舎衛之戦に負ふて大樹に隠
れて難を免るゝ事を得給ひしは此樹をさして
恩母といひしによりて其地を号して母木邑（オモノキ）といひ
しなるへし
オモといひしことをいはむにモことといふ名なりと
云説の如としたれと又モことといひし

萬葉集ニ櫻皮ある都加ことも我ともしるして讀くト
カといへる若之仙覺之説ニ櫻の字或本ニツゲリキと讀せ玉
篇ニ古曲櫻とミへたりされど讀くトザノキといふ之トガと
きなの曲也なといふ詞之ト也へるモト也カといへる屆
りける萬葉之にミへたり即ちツカといへる平常の物をしあり
櫻の字讀くトガといふうるさきも又我玉姓方之備ニ
サワラヒハなりといふその數也とはりこれいふへきは少へきて
或人の説ニ延喜式播州志宗とて播赤曰社松志宗の例哉
とも此ものはヒハなりといふ図書あるを下ても又これを
じゆれは泉州方志ニも松松志宗如松而小尖刺
大如松而文細長色赤なりとみへよれを峰ニヒハとは兩の
ありやとせ卸りみる

樺 一キ 旧事紀ニ素戔烏神拔尾毛散之成樺

陳之桃石川ん為獸兒蒼生奧津棄戸將

郎奥とのこまひしとき家されは出池陳し

花よかし池葛紫桜の和勤小桔を發向く

香臭（クサ）く味苦し土の處出て予桜へまへし

りの即此冬の俗ましひてりサこきとしてはへ緣

後桜小日出池和池よ被違てゝきとして梅

さしよ桜一兌之示推よつゝ至りとしてうたひと

こハ秋思のきたよりいひはきして所出也お
今度こきしいふ義のおいよそふ詳後の縦横
の字備用ひ譜てこきといひぬるよれそ
こきとは莫の木之といひしとこへきり 儀是翁 玉篇
をりて披は西名日申託ニこきといふとし椿ニ杉一名なり
見于爾雅と注せり日本紀纂疏ニは爾雅注を引て郭
璞云披杉木也似松生可為以船及棺材埋之不腐とこへ
きれあり文篇ふ筆始めしこきとは杉の一名之抱人のふと
呼ぶ杉の木也てしるし杉とこきハもうとぬあらく所
不来みて杉ニ根れゝるへきとこへしと私節すはて

大堂にて家原ぬりし人ら竹柴柳といふ者のイヌてきり
まそとひとりきるさし又旧事紀ニ具律藥戸羽郎ら見ると
見へしを即し榾榔と
いふものこれなり

楠

クス倭名抄ニ和名本草ニ楠音クスノキ
日本紀ニ櫲樟と読む事宗同しといへるを旧
事事紀ニ陰陽二柱乃神の名ニ石楠船
神とよみ給ひしと見へ又旧事紀ニ名ニ櫲樟
船と生みて乃藥ニ怪呪設藥用とこふしとは

日本紀には蛭児をば載天磐櫲樟船而放
棄といふ事あり又同書紀にも素戔嗚神眉
毛を抜て散し給ひしかは櫲樟と成りしに杉及
櫲樟此両樹者可以為浮宝とのたまひしも
ことわりなり又備にいひしと即今の俗此樹人
しらすとて石を取て馬にむかふ日も太
古の時よりも以舟作し不知みえて生へるとか

しれ別りや或は云えと代りぬるを云也と
して無定何分や云洋形分変を時便浮
宝とは松と櫞 椽との無樹に形枝と分也て
屈き事にいふ之と而從無は兄之なり 纂疏

楓 ヲカヅラ

桂 メカツラ 倭名鈔兼名苑云楓一名欇ヲカ
ツラ 桂一名梫メカツラ木 雅小音脩香謂之梫と

注せり並に詳後俗楓讀てカヘデとよむ
倭名鈔には漢語抄によりて雞冠木はカヘデ乃
キ辨色立成によりて雞頭樹カヘルデキ今按るへ
本名之と注せり此説のごとくさはカヘルデとのカ
ヘデとりなかのごとくこれ別なり之楓讀てカヘデ
ならざるの詳　和漢古事記にみえて天稚彦の所なる湯津楓樹の字を書けれど湯津
杜木と記されて杜木本にカツラとよみ注せられたり又
和漢にも海神宮の所なる湯津桂樹の字を書たれば

蒲柳ヤナキといふと注せりヤナキの義ハ詳
尓雅疏ヌ枝ケに楊一名蒲生澤中ニ可為箭
笴といへり注にハ歌よの方と出たれハ箭
笴とせし也婦ハヤナキといひし也古語にいふも之將てナといひす
尓雅ヌ注せり蒲ハ萬久花霍納古今注ニ柳一
名ハ楊一名獨搖シダリヤナギといふと注して古語
かしデしといひしダれといふ義ニあり垂るといひ

ゆりさまと云ふ字彙にてミデとは云ふ又本草に
了〻水楊をカハヤナギと云ひ爾雅には〻
檉一名河柳ムロといふを読せり萬葉集には
室木天木香樹並に読くムロノキといふ今
種なきも名俗に呼てカハヤナギといふ又ムロと
荻に澤東難也草にはあまる独揺といふて
の〻即白楊今も俗にはコヤナギといふものなく

峯り　ムロとしひとかハヤナキといふ
よりとかの法りも別将なし

櫻

サクラ倭名抄に文字集略を引て桜はサクラ子大如柏端有赤白黒者之と注せり我国
あしくは花と賞しぬ事は紀履中天皇
の御時殿に余の稚桜宮より始て允恭天皇
衣通姫桜花と詠じ給ひしより
此かた世の人は花とのみ書て専ら翫ぶ始

曾てしるせしものを擇て數十巻に及べり
就中國にては我国の茶なれとやうやう人家に
さればこそ傳えあるに用ひし書にいふ東のこ
ところとて玉葉の書にのせしは櫻花
中にも其種類あまたありて無名の櫻と
いふものもあるはこの次サクラといふ義のよし
も並に詳ならず東籬にてこの櫻花の事に同じ
し櫻花を無名といふ櫻に似て名は

にもあしこゝよしてサクラはんみは利に花海棠のことなり
かくふるに其よしと言へ難き事を我得之しく合ひ語りき
琉球唱菜地ての国人語に記し而るに其の楓樹の下にさへ
へ来り飯館において物語りやおしやの事て對列の人々向ひし
にかしとふはるに彼中にての楊や地とふ梅を植し強て
其花の花さし時に王桜れ人乃あつえてにもひきうけ
るかしこみもはるに其梅花にて楱とふことをひしと
昔へ来り正法聘彼の時に其学士の称悉以て對へしれ
ばえみなく彼出にてそれを以は如き之楱の字いをて對へしといふ
ぬらに楱亦似棗とのいひしとうへきり
又本草述にて桜桃一名朱桜ハカ一川る二八
クラなこしいて其語に桜桃読てハカとしてなの

ミと云せり　俗にカバといふ之又カバザクラといふ樹木をいふ　さくらとは小樺

皮とかくものにも字之まゝ和名をもて其事一の

蔽蘆ヒキサクラといふものにて和名をもて名とす

海石榴ツハキ讓名かは唐韻に云椿をツバキ以

ツバキは海石榴名上に同しかれとも和名集に

と云せり海石榴讀にツハキといふは誤り

凡そのことふれて和名同しはは土佐並に

一遍あひぬ旅人の待なきことしけれ椿と称
せらみへあり椿は別に一物之優なるの例も
ところなき物寔なれとも名同きとは何と
きり古乃附椿を称せし歟しかしまたなり
記と即しく清れの物なりとも古くは石榴
さいとらしとしつばきといひくも椿山茶に紛
きなるもの名也つばきとは古語よりいふといひし

古光澤ハ良ぐいひなりと聞ゆ其實大小光澤
ありといひし之舜水朱氏称ふのツハキと見て是山茶
之生の花ハ死山茶の如き種類多
くして巻ことまきれるの是しといふ之我師之人也凡花
木名海青花海石榴といひし事ありしこれにて海石
榴といふ事その初此より始りしとさる人のいひしかと
或人の説にツハキは山茶之俗用椿字ハ甚非といひたりし
し椿の字にかりて即今のツハキとせんこともしなるにハ
始まれるを山茶巻とさしてツハキと云しも皆非りしとハ見
へて本朝志紹興府志等考ふる如此山茶花似海石榴
又も山茶海石榴名皆一種にして見へたり他の宋之同紹興郡
府海榴詩のことさしも皆此に係りてツハキといふものと紙見
とゆへなりツハキといひサツニクハといふものはなれもの一

然して別種之楊氏ツバキと海石榴といひ車輪なり
とはいへとも今のたとき をツバキといひサヒクバといふもの
皆是其花をとりて賞せらるゝ也古の人は椿は深せし歌
とも哉を 椿と玉椿青椿山椿濱椿といひしたときを
いへるを歌の多かれと稀也しといへて花の事は及へることも
見えて此ハ古時ゝ椿の字借用をしてツバキといひしの
ことなる即今のツバキといひ又首花なとて賞せて家ゐとは
見へ當萬葉集の歌乃ツラツラ椿ツラツラニ見ともあると袖中
抄おみなは女貝とかきてタツキと讀ゝ又ツラツバキと讀も見れ
とおしみてよあやといひてを女貝は陽欠なり楊氏
常說なとしてヒメツバキといひしてこの我王の俗凡を移
にして小しきなるりのとゝのといひけれは椿讀ゝツバキと
いひしその女貝の歎みをとめるへき他見おみなは椿はツルツル
也しらぬなれ人の同しまれて見えるはすなへてツラツラと

も此樹の名ふよふかりやまスミモチといふものハ倭文注る
ハ字名字花をりて楥藁樺木之深紅をよまスミモチとい
婦女子ハ名ありとて今よて名を同しけれとさいふ亦言義
ると志へまれ楥とふとの名山をそれハ赤楊と若水の稲
まをいひ
ありき

桑 クハ

柘 ツミ 倭名鈔ニ桑柘とをにのして蚕所食之
とよひけり桑は薪の桑蚕の衣さとえさ

アクハまはクハ飼也又ハは桑ふ之蚕ふ佃ふ桑ハ

ミ称いふ之旧事紀日本紀に梔渋くハことしゝ

古尓雅に梁辭自莚者梔とこゝしきの郭璞

注ニ一半有揺一半無揺名梔もいふ我国太古

時よ弓材とすろ所ゟ天梔弓とぞいしこれ梔にて

クチナモゆゑしるをのすは実之

梔の実は黄の

極此注よ見ゆ用ゐるへし

色ツムツムとは修不食もろとも瓦郎全と

云遠云啄くハく啄の字を清てツイバムとしふ

おしらとも云此蚕の合ひ云物為といふ
之即今俗呼てヤマグハなどいふ是山中ニ
自然にふ之蘇說くヤマグハといふものあるなり何へし

梧桐きり　倭名抄云陶隠居本草注云桐
有四種青桐梧桐崗桐椅桐皆きりと為根
桐ハ皮白有子者今按俗説呼為青桐とこれ
椅桐ハ白桐之三月花紫又堪作琴瑟ハ也

也と注せりきりの義は詳ならず即介紹を経へし此樹
代るを写しこされ
まきりとふ是蘗の生を治必をもて大かりの形り
よりて名つけし物にて孫枝を劉分なといふ事もはきをを
義明りけむと
云ひつへしへし人

榫

アリザ倭名類聚抄物切鈔として榫をアリザ
枘之と注せり齊民要術に句角ホゾ
為榫即角枘之也しかしアリザとはアリ小
之也出角之サ名細之を小角細長からして

いふ事なれば小豆をアツキといふなるべし又小
豆を梓ともいひて梓弓といへり即此の
樹は津液あるとてヒサキといふ也滑也
義相ふ葉にも最末也本草に此字を借りて
ヒサキと読めりその義なしことに梓妃の義
ことに遠かり
漆ウルシ倭名抄に野王按なと見え漆をウルシと

柞

ユヽ倭名抄ニ字苑ヲ引テ柞ハ木ノ名ユヽ
堪作梳之ト所云ユヽの事ふ詳今俗ニクヌギ
といふ欤之　柞ハ濃州にても同名あり冬月落
葉ニ葉細分を作梳者とき本ハ倭名抄ニユヽといひ今
ホウソノキといふのこ欤之陸璣毛詩疏ニ櫟柞櫟是
秦人謂柞為櫟と云し陸璣抄ニ似クヌギ厚
葉ニ陶ニコナラガシハといへるとの説を
柴読ニナラガシハといふ名コナラといひしことなり
詳ならず又本の櫟不見詳なるゆ

槲

カシハ古の賦ニ盛食の物を盛るに葉

をとこしたる業を呼てカミハといひしより日本
記まての字儀にて世にカミハといふ字を用
即是之カミハといふ字義をいたさは撰太
古の附たりも国にして撕業を称せし
かの弟へてカミハとも撕業をといひより女郎
式又撕しも主撕しも千撕なれ之足
せしも俄のきよとはカミハとのとさいふ候也

柏の名と呼ひけりミツナカシハナカカシハナラ
カシハコナラカシハコノテカシハなといひしかと
されと後は柏の字を借用して謂てカシハ
ともいひけり古事記に御綱柏と書し
日本紀に葉盤柏海藻をカシハとよみて
いひ本草式にも亦書柏千柏等字を
用ひつ猶是しかことくさまを倭名類聚を

本草唐韻等に引て榧をかへハ柏一名
上同しと注せり是ハ我国の方言なると
いひしよりて色々称ふる柏の字にて又
本草果部中品柏実一名榧子和名かへと
注し西鏡に皮柏十名楊和名かへとして榧に
かへハ柏和名と同しく注りたるものなるを以
しるす古歌にもかへの木又松柏の常盤なるよて

しるのこれを詳なり弁を子の柳子の原より
こふりカミハといひしハ我玉の中言字読て
擬ふかれし扨を読くカミハといふなるを
を極字の正訓ハ伝ハ原語孔縁を一字は
して其訓ハ語るなも聞しれをも字を百字
いのくちかへと読て之にいのてとカミハと
読むるよなりいりこれを伝承しても

こも義にはしる物なれまなかなにミヅクカミハは御門歳浅川の岸に
ちかきもんへきもそのころと哉けと肯座ゆりもん今
の代なは志摩国の日まくの鳥とる宗ゆり体のよまつて
乃やしみておもひそあるとされたるこれは神文四交の御祭の時必
入りもの之ナガカミハともいふ之に祭ふカミハのやしみて酒サ三四寸长
三尺ハかり傳はりて事の由縁のきふすは紙すとこへ去りなの
之治セし所謂也のきふ物の事をいまさ洋為に掖て辯ぜれは
是へ比て又底き乃小みとおもな拘ともこえへ比て古來記の中に
に仁徳皇后在紫し給ひん書なれ御潤にふとりみれは四
な幸洵セし所謂とこえへ範紫風土記には御津の柏とこへ四
史なとに三角ともいへなれ古名は三ツナともいひけて又三ツノ
ともいひし之三角とミえてその名は古風ふりよ調と十とい
ひしかもと河内セ十といひ乃とけしてちなに河内之ミヅと
も即瑞之瑞宗とは総瑞穂なとしいふなけとく云ふ物にする

並に続く十六といひけり 仙覚抄によれ
古歌は志らやまかにはいつく十三十二段と
いふ也此木ハワクゝ係ふりつ枝の名かやゝ故に条とそ
異説のさましあへ ありて 説文は楢木葉也之
とし宿みちこにを念合ひ ありて 椚櫟のひとつ
をとゝナラクヒロハ とし ナラノハカシハ とよひ 楢櫟
なとき とゝし コナラカシ と いふ から 山とゝき 宗ことなり

此等形を通し

楡やミし偏名楡よ尓雅にと云ふ楡ら波色白

名楡やミしとは皮の

粘滑形名以て秘書の俗粘滑なる名やこ呼

ふ膳膠等也字書讀くやこといふなりこ

主きしとよぶ同細之まずこミしといふことミしとは形

似枯れ形ハリといふなりと

しとひハリといふ文將讀之文麺なるし

將めの伝よこく也

白膠木ヌデ 倭名鈔に和名本草にも同じく標せりヌ
デ 辨色立成に白膠木名上同じと注せり是
ことヌ一名なりしを二物とし出せり標も誤なりし
アフチといふは 下ニ云ふ 藤垣草アフチあれこそ立ちたり 白
膠木は日本紀にヌリデといふ是を註せしなり
その外にも楠木を宇ち 五倍子即ち蕗木の
本とはヌルデといひ きみをふしといふその此

ミヌリテといひステといふは云膠とせしぬ

るといひしところへそり　又とは黏ころといふもき　書おほるところテとい

出也標樹ホ云洋は事とりて若水にて正しきりしに

これ詳ならんといひさ

楝

楝アフチなる萬葉集に桐而之巻とあるしくアフ

チと読り倭名抄に玉篇とりしく云子可洗

衣者之和名本草にアフチといへ通し也

アフチの實云洋棟子即苦棟子なり全是珍子

子と俗にセンダンといふなれど通俗標の家譜て

アフチといふは汁物にいふらしけれど俗にセンダンといふ事ふ依

又栴檀をと俗に呼ひしセンダンといふなれと
二物みなと一名なるべし

歴木クヌギ 景行天皇紀 崇の後道に筑紫に幸の

御とて時木の高田の邑にて大りし倒セし時

に歴樹長九百七十丈ありて皆人そ者

蹈て行きかふを樹のにに曲るせあひし

小さきりの老丈ありてこれを歴木といはれし
儘とさりし池かは朝りまへ梓弓の山ゆ還し
夕日には阿蘇山を覆ひきろきとやせしとは
平化御木国とよつ号ひしと日本紀にみへ
て其事又筑紫国風土記にも見え倭名
抄に本草に云く樟樹クヌキ日本紀の歴木之
と注し又鈎樟一名烏樟とし クヌキとしるせ

泥し魚り此二物由りて一名之とこへり一説

又釣樟とはナミクヌギよしと宣みへる也 藤原 草に

クヌギの考ふ詳 日本紀に見木の国にはさ 樹の四足はつゝめと天皇そ

の比と御木の国と名付のひしよ是をて歴樹をクヌキ

といふくもの四足ハかくいはし名はクヌキとハ名也

本くしふ条しにたるよりヌといひクニといふよりて

いゑし也是を斟樟の林と考へ国抄と中せし帰是之

ある又神武天皇紀に見へし

母木の名とあしよ似てなり

檍

アハキ倭名抄に橿ハ日本紀私記に阿波木と

いぬし梅又櫨木一名之櫨ま於年木之一
名櫨かとしふ又杻械の杻と注せりその注
せし所ふよりてアハキといひかとといふ二名
あり一物と見へきり故古今の名同し
かるぬふや或ま東西の言の差也しふや詳ぬ
る事ともなし入旧事紀ふ櫨木と志ふさくえる
記ふ白檮と志るして並に読くかとといふ語

梭
ツクユ ツキユ
欄
ワクキ

檀
ユヽ杜仲 ユヽ衛矛 ユヽ カハク
ツヽラ 杜仲
サキ 衛矛

一を紫に君が深く江湖がいはし之 杜仲か上の叔孙のまはしを注せり
従せえ川へき
ぬり

朴

エ日本紀に朴読てエといひけり倭名類聚には爾雅
注に曰く樸亦作樸一名榅エといふと注せり 鄭
夾際爾雅注及び通雅 正字通等に據るに 日本
紀に朴読てエといふ説に従ふ也 倭名類聚には
しかのたくひまたは言にて據とて原エと云

莪之篇に按 繫ふさはしからず候なり 陸璣詩疏云 秦下繫迷一
名䓘檖といへるの鄭夾漈も檖檖と書して 此語吽朴樹
ニ也本加檡子大如柿柏子而黄ナリといふ 正字通ニ朴樹實白肉
紫其六月開細花結實如冬青子生青熟亦有核七八月采
之味甘系とほしきものにて 此るエノミといふの即是之
○檖字讀てエといふ事也既に久しくして 秋生の方言のなど
泉ありしと此注にエといふは国史にみ十古之證也
つきまみや 亦借てムクエノキといへるの也 陸璣詩疏
況括筆讀補箋に按ふに梓樕一名駁馬
一名樸即是指の秦風に駁とみへしもの

むし侍かくの山々れ
事とはなし
辛夷コブシ倭名抄ニ辛夷とは飲食記ニ收めて
崔禹錫食經としき辛夷其子可噉之やてア
ラヽキ一川ニコフシハジカミともいふ[illegible]ありて天武
天皇の御時大彦命の後名代場巻[illegible]也
しか河地巻とも同なりしニ辛夷巻也
巻してきり經云巻して称巻也とかけ

川と称し強く辛夷花之と申にハ頗信忠
叓連性と偏見するといへるハ是なれど

姓氏

俗にコブシの名は皆へアララギとは甚香は
いひハしかてとは甚味といひしと見へたり
コフシとは花始開く時に小児の拳のことく有とい
ひ朽木古説のもの植するもの薬漢
てアララギといひ藁漢にてハしがてとし詳に其の藁の
俗ノ名へ名り

棬

しきを優先称す唐韻と引て棬ハ青木也

漢語におほしきとしめ又山海經なとにて
莽草可以毒魚者之和名本草にしきみと
いふと注せられたりと一名にして二物ならぬ也
此字樒ハ正字通にも見えたるに木樒樹所
久乃香俗作樒樒と云へるより誤来然ば
草又密代之五六年乃取殺を香とす
いとの即此之ハ時物入まくれ也此ハ誤なる

而して又かの莽草は即䒚草一名鼠莽
寇宗奭が衍義に莽字誤れり皆謂之䒚
而本草居木部今世所用皆是木葉如石南
葉枝梗乾則皺揉之其臭如椒といふ
その和名本草にしきみといひ世人これを
葉を採りて花ぬしの樹皮と末して
香と成し佛前等に供ふるものなり是之

けと薬毒なるものといふべし本密
の字はことごとく法華経を出家にいはれぬる
借徳ねよは檜の字は借用して借りしを
きこえといひしところへ母りしききことといひける
萬ゆふ集ねよしきこえしくしもといふ詞之
少こへあらてもいふ詞内之をもふの哉
きしかいふ前り

そのしも文月ふ武蔵東路の年奉りあひ
しけ比比羅木ハ八尋矛と名付しともある
と見え続日本紀に文武天皇大宝二年夷
造宮職献杜谷樹長八尺と見えハ梓根也
伊勢太神宮に奉献しとこそ傳え
和名之下に本草云黄芩ハ和名ひゝら
ぎ漢語抄云杜谷樹和名ひゝら木同しと云

戟天と注せりその杜谷樹といへるの語系
於華すみ木枸骨樹又副穀樹とも猫児刺
とも鳥不立樹ともいふもの即ちヒイラキといふ
此ヒヽラギとはもとひふ刺角あるかの名にし
ところへそあり 古のはるかといひけりヒヒラキは
力瀬と擬めおしめるかの名
便黄芽巴戟天のことときに全く別也
二川の杜谷樹とは同じ巴戟天とや

えとえへ傳りこそかしふクサギハ臭桐又ハ梟梧桐のことい而
以り臭桐と百効全書ふ見え臭梧桐ハ群芳譜ヌ
みへ
あり

竹

タケ萬葉ふおほく竹とはたかき義をとりけり
とは古説ふ唐とケといふをたゞしくタケとは竹
生ひて高きをいふ也漢名おほく筆竹と漢
語おほいふ呉竹之ク也タケといふも又へしハ是と
俗ふカニチタとよいゝものを字ふ書紀をして体之

雪竹俗ニ寒竹といふもの也寒之似漢竹也
淡竹和名ニホタケといふ七絃漢宜作笙之
しはヲホダケともいふ大竹之即今俗ニ多くチク
よりて是を字とあらハしていふ味く成ばニたとハ
チクとしいふなり白竹之笛竹をいふ又苦竹
和名ハタケといひ本朝式ニ河竹の字をも用
七絃宜笛竹作笙といへ古にてハタケといひ

即今俗にダケといふ此之篦は、箭竹名也と
云へるは即ち俗にいふタケとしヤノタケといひ
箭簳とあれは此の篦の名は古語なる所
いひしをいひきり蔣鮫切頭と見し篠、
は細く作りたる二ツのせしむ俗用に竹字と
云へしを見しにもれしよりの事を種類あり
めかりにあつかひしほとはせきしよ語の所せし

なよ即細竹なりとも即節之廿とは即細
き也　日本紀に小竹讀てしのといふと云へり倭名抄に
俗用といひし事仍てしのといふなり
篠竹しのにて義
宗なるに何にも篁なり夕カムナ初もとこそは
呉竹俗には笛竹といふことし兼名苑には竹
長間竿はしノメ竿青最晩生味大苦之と
みすゝは小竹いゝ茅といふ即し俗にかけべ
夕ケとしては玉纏の竹をして又ナヨタケとも

素戔烏神出雲より天降て韓郷
之嶋には金銀有吾児のしらす國にて
浮宝はあらてはよからしとて鬚髯を抜
むねの毛を抜散して杉檜櫲樟柀となし
給ひ又噉給ふ文十木種をは皆能播生し
御兒五十猛神妹大屋姫神抓津姫神
三柱乃神又能八十種の木だねを布施伊

出に流し奉る即此出て不祭に神之也
古事記日本紀等に見へ凡上古の俗物を
呼てけといひしとみへしは彼神託鋳毛物
其出し不知ならす霧をも紀に出と本国と
いひしと又此等の事紀に見えて見へ古事
記本や呼ひてけといひけとつるかにも記傳を
称していひしと見えさしも不知なり

陰陽二柱の神生ましゝ木秋草祖等
殊に守池神ましゝ鳥石楠船神ありし神
しるして日神天天磐屋戸まきりなれし附
天の香山に望床天之降坐て迦らゝゝ半帆蛍
須彦棲知の神は瑞殿と造らしゝ大使め
使乃杖ありしこゑ文彼神の斬なれしを
八岐大蛇のみなは羅さしゝ松柏橿杉背

上にまひらるゝも志ゆるしは書籍をと
うしく化し生しめ侍るべきにあらねとも
まことかの紀し御もとかたの風ニ太古の事乃之
いさゝかそのしるしなし難波のことひの
須思つかし西邪也耳残同なるへき みし
けふ活て三郎求む御き事之給矣
御本件の歌にみせし取ても事のとい

こゝに新しく訓じたる或は書本に見えたる類ハなか
はしり所からなる様にいへり椶櫚とスロといひ
ひ陵苕とノゼウといひ本草にはモリウニといひ
いひ皂莢をサイカシといひ其並に字義
吉と呼し呼びし之字朴とけるかもハキと
いふたぐひなる者の朴字の音を呼して作
いひカモハしとは音を呼ぶ類にいひし也五加とウコキと

以上十一字をウコは五加の清音にして件ん
ひきハ即本邊合歓木にあるムリノきといひり
古にしへきをその称御箸鈑るといひし又おほふ
ゆふるカウカといひしをこれ字音にて呼ひ体
ひとへに此ふの数文釈して後みとなりて
其後古きけれど世の俗にひつきし前の
ならひを其まゝに用ふるなり

以

已上樹竹